

安心の設計

介護職の外国人材

言葉の壁克服へ 施設の試み

在留資格「特定技能」が4月に創設され、介護分野でも今後、外国人材がさらに増えることが見込まれる。そこで問題になるのが、日本語能力。職員や施設入居者らのコミュニケーションに加え、現場では専門用語も飛び交う。言葉の壁を乗り越えようと工夫している施設の取り組みを紹介する。

「利用者の体温管理のため、車いすに移る直前まで、布団は取らないようにしましよーう」「移動させやすいように、ベッドは車いすより少し高めにします」

特別養護老人ホーム「メゾン・二宮」(神奈川県三宮町)で働くミャンマー人のヤ・ミン・トゥさん(23)と、テツ・トゥンさん(23)は、ノートパソコンで動画をじっと見ていた。介護の注意点を説明する日本語の音声に合わせ、画面にはミャンマー語の字幕が流れていた。

2人は技能実習生として4月に来日したばかり。同ホームでは、高い技術を身につけた介護職員になってもらおうと、動画学習を導入した。

トゥさんは、日本語能力試験の5段階のうち、日常会話を理解できる「N3」に合格済み。まだ、難しい日本語の会話は苦手。「字幕があると理解しやすく、学ぶ意欲もわ

字幕付き動画学習 / 翻訳アプリで記録作成



ミャンマー語の字幕付き動画で介護技術を勉強するトゥさん(左)とテツさん

く。「誤嚥」のような難しい言葉も、ミャンマー語の説明だと分かりやすいと笑顔だ。教育担当の内田生雄さん

(村上藍)

(31)も「母国語の方が理解を深められると思うし、人手不足の中、教える側の負担も軽減できる」と導入の効果を説明する。

動画は多言語の翻訳サービスを提供する「エヌ・エイ・アイ」(横浜市)が制作した。介護の必要な度合いごとに、食事や入浴の介助など様々な

場面を撮影したもので、10分ほどの動画が約100種類ある。ミャンマー語、英語、中国語、ベトナム語、日本語の5言語の字幕がある。同社の伊藤秀司社長は「仕事内容を早く理解するには、初期段階で母国語のサポートがあった方がいい」と話している。

＊

日本語能力が必要とされる課題の一つに、介護記録の記入もある。三菱UFJリサーチ&コンサルティングが全国約5600施設を対象に、昨年実施した調査によると、約1000人の外国人材のうち、施設側が専門用語も含めて、介護記録などの文書を書くことができないとしたのは、3割弱しかいなかった。

こうした問題に対応しようと、介護老人保健施設「クレオ」(千葉県我孫子市)では、スマートフォンで介護記録を作成するアプリ「みんなのKAI GO」を導入している。

このアプリは、日本語のほか英語、ベトナム語、中国語の表示が可能で、項目を選んでいくと、日本語の介護記録ができあがる。備考欄は音声で入力でき、外国語で話して

「職業ごとの日本語」も大切

介護現場で働く外国人材は、経済連携協定(EPA)や技能実習制度で来日した人、留学生として養成校で学び、介護福祉士の資格を取得した人たちだ。ここに、新たに特定技能の資格を得た外国人材が加わる。

厚生労働省は、介護現場で使われる日本語などを学べる教材を、インターネットで公開している。EPAの介護福祉士候補者と技能実習生は、来日前後に数か月間の日本語の研修を受けることになっている。

ただし、特定技能については、介護技術と日本語の試験に合格していることから、働き始める前の研修制度は設けられていない。このため、日本語の勉強は、独学か受け入れ施設が支援する形になる。

外国人の労働問題に詳しい国士舘大の鈴木江理子教授(労働社会学)は、「ドイツや韓国に比べて、日本は公的な体制が整っていない。国が生活に必要な日本語を学ぶ仕組みや教材をつくり、そこに職業ごとの日本語学習も追加していくべきだ」と指摘している。



アプリで介護記録を作成するガーさん

も日本語に翻訳される機能もある。

留学生として17年来日し、介護専門学校に通いながら、アルバイトで働くベトナム人のグエン・ニユ・ガーさん

ん(25)も、このアプリを使う。学校の実習では1人分の介護記録を作成するのに2時間かかったが、アプリでは大幅に時間が短縮できたという。ガーさんは「文章にしったり、漢字を書いたりするのは難しい。記録を作れないと、入居者も担当できない。アプリを使って早く一人前になりたい」と意気込み、介護福祉士の資格取得を目指している。

施設の遠藤友和介護科長は「日本人でも、事実の切り取り方や表現の仕方は難しい。アプリは、まだ日本語が得意でない外国人の助けになる」と話している。